

旧住友銀行熊本支店社屋

正会員○中嶋泰史*¹ 同 吉武隆一*² 同 山里光季*³ 同 江藤広樹*³ 準会員 山本瑛美子*⁴

9. 建築歴史・意匠—2. 日本近代建築史

住友銀行、銀行建築、様式建築、熊本

1. はじめに

熊本県熊本市中央区魚屋町にある旧住友銀行熊本支店社屋(三井住友銀行熊本支店)は、昭和 9 年(1934 年)に建てられた熊本を代表する近代建築の一つである(写真 1)。魚屋町界隈は、大正から昭和にかけて坪井川の水運により経済発展を遂げ、熊本市の金融街であった。平成 30 年 1 月 15 日に現三井住友銀行熊本支店が新市街に移転されたのに伴い、当社屋が売却されることとなった。幸い、建物の容姿を損なわないことを条件として買い手が見つかり、現在のところ保存される見通しである。この度、三井住友銀行管理部及び熊本支店法人部のご厚意で、当社屋の実測調査(平成 30 年 7 月)を行うことができた。竣工当時の図面の所在はこれまで確認されていないことから、今回の調査で得られた図面は、貴重な資料になるであろう。そこで本稿では、調査の概要を報告すると共に、その歴史的価値について若干の考察を加えることとした。

2. 概要

当社屋は、旧城下町の寺町の一つで、一辺が 110 × 110 m の正方形をなす街区の北東隅に位置する。建物の北側は電車通りに面しており、これと直行して米屋町通りがある。社屋は大正 14 年 9 月には現在と同じ敷地にあった醤油製造を営む西市原屋の一角に支店を構えていたが、昭和 9 年 12 月に現在の支店社屋を新たに建設した。敷地面積は 299.55 坪、延床面積は 480.27 坪、地上 3 階、地下 1 階の鉄筋コンクリート造である。また、当社屋は新聞記事や実測値からおそらく尺貫法で設計された。

3. 社屋の現況

1 階平面(図 1)

1 階平面は内法寸法で東西方向に 26.54 m、南北方向に 24.03 m の長方形をしており、南西隅に 4.01 × 8.01 m の行員用便所を増築している。建築面積は 647.53 m²(約 195.9 坪)である。建物の平面は約 5.6 × 4.5 m (18 尺 5 寸

× 15 尺)の長方形グリッドを基準として柱が割り付けられている。1 階は中央玄関・風除室を含め 11 の部屋で構成されている。中央には、約 16.8 × 13.4 m (55 尺 5 寸 × 44 尺 3 寸)の広大な営業室があり、それを囲むように北面と東面に客留、南面と西面に諸室が並ぶ。北側中央と東側中央に客用入口があり、それぞれ風除室が設けられている。北東部の一角は、現在 ATM・CD の設置のために増築された壁が設けられている。西側は北から順に会議室、客用便所、金庫室・帳簿保管室が配置されている。北西階段室は 1 階から 3 階までつながっているが、現在は 1 階が客用便所となっている。南側は東から順に応接室、南東階段室、応接室、支店長室、休憩室、行員用出入口、南西階段室があり、南西隅には増築された行員用便所がある。会議室、2 つの応接室および支店長室は内装の改修が行われている。南東階段室は左右に隣接している応接室への入口がそれぞれ設けられていたが、応接室の改修によって現在は利用できない。行員用出入口に隣接している南西階段室は屋上階まで続く主階段である。

2 階平面

2 階はその大部分が 1 階営業室・客留の吹き抜けとなっている。西側は北から順に予備室、北西階段室、書庫が配置されている。西側の書庫には南西階段室と北西階段室の両階段室から出入りすることができる。南側には東から順に、南東階段室、休憩室、女子ロッカー室、VTR、南西階段室となっている。南西階段室から女子ロッカー室へは廊下でつながっている。女子ロッカー室と休憩室も 1 階と同様に内装の改修が行われている。南東階段室には、休憩室への出入り口が設けられているが現在は休憩室の改修によって利用できない。しかし、南西階段室から女子ロッカー室までの廊下と南東階段室の休憩室への出入り口跡から、もともとは南西階段室から南東階段室までは片廊下で繋がっていたと思われる。

A study on the former Kumamoto branch of Sumitomo Bank

NAKASHIMA, Yasufumi., YOSHITAKE, Ryuichi., YAMAZATO, Mitsuki., ETO, Hiroki. YAMAMOTO, Emiko.

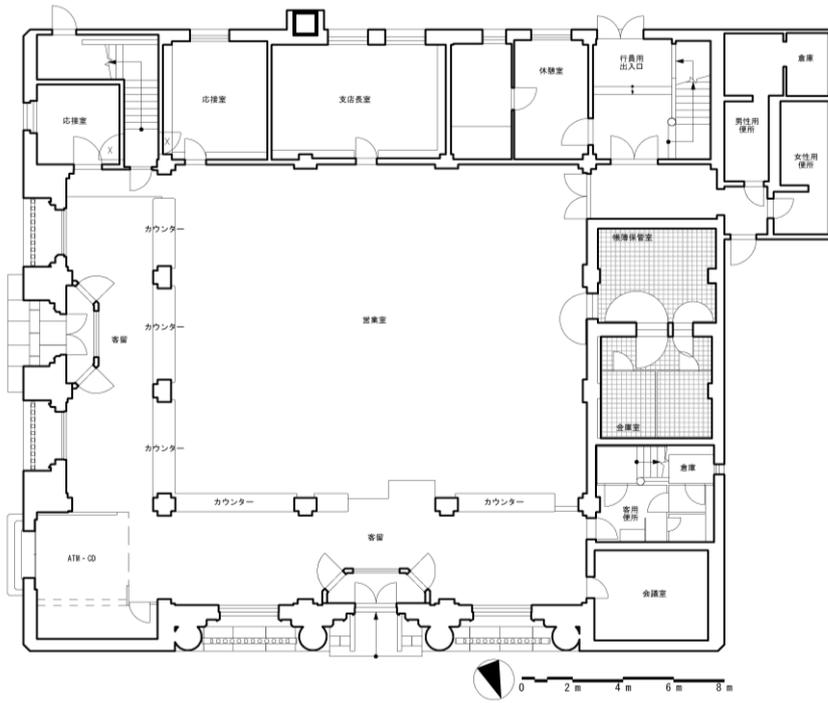


図1 1階平面図 (1:300)



写真1 旧三井住友銀行熊本支店社屋
(北東から見る)



写真2 北正面の半円アーチ



写真3 1階接客ホール
(南西からみる)

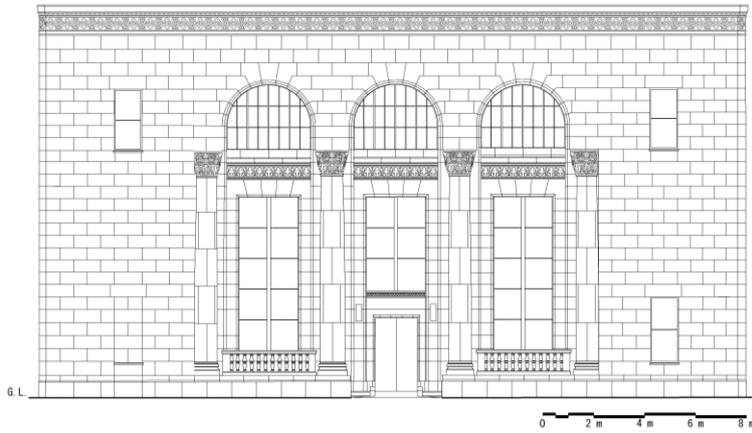


図2 北立面図 (1:300)

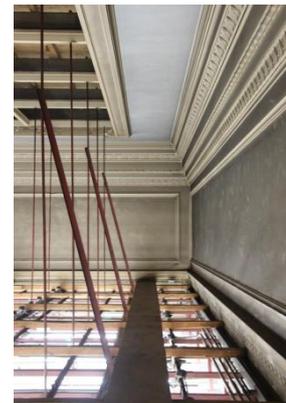


写真4 営業室折上天井内部

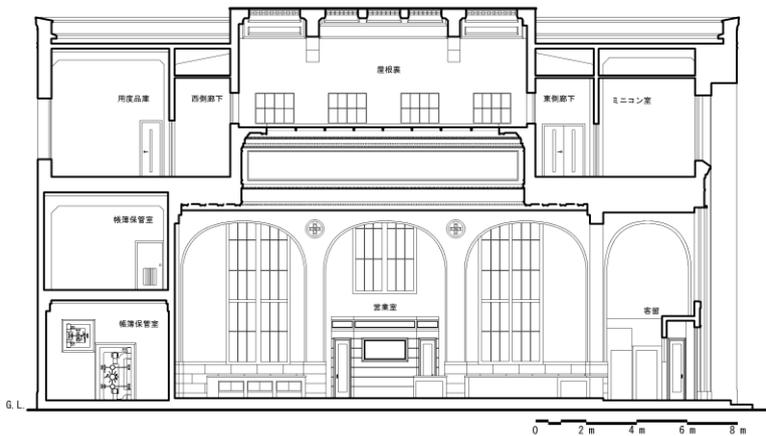


図3 東西断面図 (1:300)



写真5 北正面

3階平面

3階は、営業室上部の天井があり、これを囲むように廊下が巡り、現在は8つの部屋で構成されている。北側には3つの会議室、西面には北から順に貸事務所、北西階段、用度品庫、便所となっている。東側は北から順に貸室、ミニコン室、南東階段室となっており、南側は食堂、厨房、南西階段室が配置されている。廊下で三方から囲まれた中央には、折上天井の屋根裏部屋があり、廊下には高窓が連続して配置されている。北側の会議室は内装が改修されており、壁がいくつか増築されている。屋根裏部屋には北側にもふさがれた窓が残ることから、屋根裏部屋の周りを一周する廊下があったと考えられる。

屋上平面

屋上階へは南西階段室からのみアクセスできる。中央には切妻のトタン屋根がかけており、南側には地下の焼却室から続く煙突が出ている。

地下平面

南西階段室から出入りできる地下階は、北側の廊下を中心に直線上に焼却室、南側に旧ボイラー室が設けられている。さらに、地下階全体を回るようにボイドが設けられている。屋上階に突き出た煙突は、焼却室の南西隅にある焼却炉からボイドを通して繋がっていると思われる。

北立面(図2)

建物全体の軒までの高さは約15.6m(51尺5寸)、間口は27.71m(91尺5寸)である。北立面は、高さ約11.5m(38尺)、幅約3.3m(10尺9寸)のロマネスク風の三連アーチとそれを支える4本の疑似コリント式円柱が特徴的な立面である(写真2、5)。アーチ以外には窓は少なく、全体として量感のあるデザインである。左右のアーチでは上部をアーチ窓とし、下部には縦長の長方形窓を設け、アーチ窓と長方形窓の間は、小さなエンタブラチュア状の装飾帯で区切っている。1階のアーチ前には、装飾的な手摺が付けられている。中央のアーチは、1階を中央玄関とし、2階部分を長方形窓としている。アーチ窓と長方形窓の間は左右アーチと同様に装飾帯で区切られ、長方形窓と中央玄関の間も別の細い装飾帯によって区切られている。立面の1階と3階の両翼部には簡潔な矩形の窓が設けられている。現在、1階東側に位置する縦長の窓はATM・CDコーナーの設置に伴い閉じている。立面頂部には、長い装飾帯がコーニス(軒飾り)を巡らせている。

東立面

建物全体の軒までの高さは約15.6m(51尺5寸)、間口は24.719m(81尺6寸)である。東立面は北立面と異なり、円柱が無い。また、三連アーチは高さ約10.6m(35尺)、幅約2.4m(7尺8寸)となっており、どちらも北立面のアーチよりも約1m(3尺)小さい。1階と3階の両翼部の窓は北立面と同様に設けられ、現在、1階北側の窓は塞がれてATM・CDコーナーへの出入口となっている。なお東立面にも、長い装飾帯のコーニス(軒飾り)がある。

断面(図3)

営業室と客留を区切る柱間は、短手方向(南北方向)は半円アーチ、長手方向(東西方向)は楕円形のアーチによって結ばれている。柱直上のアーチとアーチの間にはメダリオンが配置されている(写真3)。そのモチーフは屋号とは関係がないように見えるが、詳細は不明である。また、客留上部に見られる柱から壁までに正円に近いアーチが設けられている。営業室には高さ7.5m(24尺7寸)の天井が設けられているが、本来はその上が折上天井となっており、アッテック風の壮麗な装飾が現在でも残っている。また、屋根裏にはトップライトが設けられている。

各部詳細

天井断面詳細

営業室の天井は折上天井となっており、本来の天井高は10.6m(35尺)であった可能性が高い。現在は人工照明を配置する天井懐となっていて、天井板で塞がれているが、その内部には古典主義的なアッテック風の装飾帯が施されている(写真4)。折上天井には、格子状の枠組みが残っている。住友ビルディング(昭和5年)で類似した折上天井のアッテック風の装飾と格子状のガラス板が見られることから、熊本支店でもガラス板が張られていた可能性が高い。

屋根伏詳細

屋根裏の天井はトップライトが設けられている。RCの大梁によって大きく3区分に分けられている。東西両側の区分には南北に3つ並んだ長方形開口部が設けられており、その中に正方形のガラスブロックが10×9枚配置されている。中央の区分は、3×3個の長方形開口部が設けられ、さらにその中に10×7枚のガラス部ブロックが配置されている。

耐火ブロックの利用

1階の金庫室・金庫前室及び2階の書庫の床面には18cm(6寸)四方の正方形の耐火タイルが使用されている。

開口部付近の納まり

北正面の三連アーチは構造体ではなく、イントラダス内部はピットとなっていて雨樋を納めてある。また建物の外壁に面するすべての窓には、防火シャッターが取り付けられている。ガラス窓の脇には巻き上げ機が壁内に埋め込まれており、手動で操作する仕組みであった。

4. 長谷部鋭吉の意匠的貢献

当時の新聞記事や建設経緯からみて、設計は長谷部竹腰建築事務所(現日建設計)、施工は大倉組(現大成建設)と考えてほぼ間違いないと思われる。長谷部鋭吉は住友本店営繕課、住友合資会社工作部時代に多くの住友銀行の社屋を設計し、日建設計の前身となる長谷部竹腰建築事務所を竹腰健造と共に設立した人物である。

坂本勝比古氏の研究によると、長谷部は大正8年(1919年)と昭和6年(1931年)の二度にわたり建築視察の欧米出張を行っており、イタリアのロマネスク建築に深い影響を受けたようである。他方で、石田潤一郎氏の研究で知られるように、長谷部自身は学生時代から卓越した造形力でも知られた秀才であったという。

熊本支店社屋と類似する住友銀行支店社屋として、浅草支店社屋(昭和3年6月)と横浜支店社屋(昭和6年10月)、神戸支店社屋(昭和9年6月)が挙げられよう。これらの支店社屋では共通して、正面にロマネスク風の半円アーチと円柱が用いられている。とくに横浜支店社屋は、営業室内にも連続アーチを用いるなど、熊本支店社屋と極めて似た特徴をもつ。

熊本支店社屋が建設された昭和9年(1934年)は、不況により住友銀行営繕部が解散し、長谷部竹腰建築事務所を設立した直後であった。不況の最中にあっても多くの地方支店を建てる住友銀行の方針には変わりなく、少ない所員での業務は困難であったに違いない。そんな中でも、長谷部はパターンを繰り返すをよしとせず、支店ごとに特色ある意匠の創造に努めた。

熊本支店社屋は、横浜、神戸の両支店社屋に比べて外観の開口部が少なく、より量感が強調される。また、浅草支店社屋のロンバルディア風のモチーフは、熊本支店社屋ではより幾何学的な装飾へと変化し、アーチ内の水平な装飾

帯と共に、水平線を強調するラインを形づくる。

長谷部のメイン・モチーフである円柱と連続半円アーチを組み合せの出自は、おそらく長谷部自身ではないだろうか。神戸支店で試みた網目模様のある細長い円柱、バスケット状の柱頭、アストラガル等で細かく装飾されたアーチ等の装飾は、もはや熊本支店社屋では繰り返されない。むしろアーチは量感のある壁体の中に吸収され、アーチの支えは溝彫のない太い円柱と網目模様の柱頭とに置き換えられた。このように熊本支店社屋では、長谷部らしい「量感」と「輪郭による稜線の強調」とが際立っている(写真5)。その実現のために、防火シャッターをアーチ上部に納め、雨樋を壁体に隠すなど、意匠への努力を怠たなかった。そこには、長年の同僚である竹腰健造の設備技術と配慮も欠かせなかったであろう。

5. まとめ

大阪本店の住友ビルディングを除けば、旧熊本支店社屋はおそらく唯一現存する住友系の支店社屋である。様式建築からモダニズム建築に向かう「様式の解体期」にあって、長谷部・竹腰らはRC造の新技术に支えられた独自の表現を求めた。それはモダニズム建築の先取りと言えるかもしれない。このように良質な昭和初期の建築は、熊本のみならず全国的にもみても減少しており、震災後急速に変化している古町界隈の街並みの一部として、今後も永く保存・活用されることに期待したい。

謝辞

この度、旧住友銀行熊本支店社屋の調査にあたっては三井住友銀行管理部及び熊本支店法人部の関係者の皆さまに大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。また実測調査では、熊本大学日本建築史研究室(伊東龍一研究室)の東啓介さん、荻原尚美さんにご多大のお世話になりました。ここに謝意を表します。

参考文献

- 1) 村松貞次郎編、『日本の建築 明治大正昭和 5. 商都のデザイン』、三省堂、昭和55年
- 2) 日本建築学会編、『日本近代建築総覧：各地に遺る明治大正昭和の建物』、技報堂、1983年、404-407頁
- 3) 石田潤一郎著、「近代日本 建築家の足跡 長谷部鋭吉」、『建築文化』527号、1990.9、169-176頁。
- 4) 坂本勝比古著、「モダンエイジの建築遺産(18)住友ビルディング」、『建築と社会』91号、2010.9、39-42頁。

*1 熊本大学大学院自然科学教育部博士前期課程生
*2 熊本大学大学院先端機構 准教授 博士(工学)
*3 熊本大学大学院自然科学研究科博士前期課程生
*4 熊本大学工学部建築学科 学部生

Postgraduate student, Kumamoto University
Assoc. Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
Postgraduate student, Kumamoto University
Undergraduate student, Kumamoto University